



2021 年度日本語教育学会支部集会予稿集

【九州・沖縄支部】 2021（令和3）年7月3日／オンライン開催

2021 年度第 1 回支部集会【九州・沖縄支部】

日時: 2021年7月3日(土) 13:00-16:50(受付開始12:30) 会場: Zoomによるオンライン開催

主催: 公益社団法人日本語教育学会 参加費: 500円(要マイページからの事前申込)

◆支部集会日程◆

12:30	受付開始
13:00-15:00	講演
15:10-15:30	口頭発表(質疑応答) 1件
15:35-15:55	交流ひろばⅠ(意見交換) 3件
16:00-16:20	交流ひろばⅡ(意見交換) 2件
16:20-16:50	よろず雑談会

【13:00-15:00】 講演

「コロナ禍が労働市場に与えた影響と POSSE の取り組み」

講師: 渡辺寛人 氏 (NPO 法人 POSSE 事務局長)

新型コロナウイルス感染症の影響で技能実習生をはじめ、留学生のアルバイトなど外国人の労働環境に大きな変化が起きています。それは日本語教師にも無縁ではありません。本講演では、今、労働市場に何が起きているのか POSSE の取り組みをふまえてご講演いただきます。

【15:10-15:30】 口頭発表

※本発表は査読審査を経た学会発表です。詳細は 3 頁からの本予稿集原稿をご覧ください。オンライン開催では、事前に発表動画と予稿集をご覧いただき、質問フォームによる事前質問受付および当日の Zoom において 20 分間の質疑応答をいたします。

「留学生の LMS への書き込みに見られる高次思考力—文のモダリティに注目して—」

松本剛次 (長崎外国語大学)

【15:35-15:55】 交流ひろばⅠ (3 件)

※ブレイクアウトルーム間を自由に移動していただけます。オンライン開催では、事前に資料をご覧いただき、当日の Zoom において 20 分間の自由な意見交換をいたします。Ⅰ、Ⅱ同様です。

① 【ブレイクアウトルームⅠ】 実践紹介「多文化に生きるこどもたちの多言語スピーチ会」～25人のこどもたちの「自分のことば」からの気づきと学び～

立山愛(別府大学)・柄原玲子(立命館アジア太平洋大学)・永尾美保(別府市教育委員会)・

八丁治子(大分県宇佐市立四日市北小学校)・外園孝子(大分県中津市立沖代小学校)

私たちは「多文化に生きるこどもネットワーク大分」という有志のグループです。多文化に生きるこどもたちのよりよい育ちを応援するために活動しています。25人のこどもたちが「自分のことば(日本語だけでなく母語や継承語等含む)」で「自分のきもち」を表現することにチャレンジした「多言語スピーチ会」の実践紹介をします。



② 【ブレイクアウトルーム2】 日本語教育への対話促進ツール「クロスロードゲーム」導入の試み

豊田真規(元兵庫県立大学)

私は、日本語教育関係者に、クロスロードゲームという対話促進ツールを知っていただきたいと思っています。このゲームによって、どのようにグループ内で対話が起これ、それがどのようにゲームになるのかについて、実施例を通してお話し、日本語教育にどのように導入できるかについて意見交換したいと思います。

③ 【ブレイクアウトルーム3】 日本語教員が担う管理運営業務のロードマップ作成の試み

中川健司(横浜国立大学)・平山允子(日本学生支援機構東京日本語教育センター)・
浦由実(アン・ランゲージ・スクール成増校)

日本語教員は、所属機関で授業以外にも学生対応や時間割作成等の様々な管理運営業務を担っています。私たちは、先行研究の調査結果を基に日本語学校の教員がどの段階でどのような管理運営業務に関わり始めるべきかというロードマップを試作しました。本出展では、これを基に日本語教員がキャリア形成の上でどう管理運営業務に関わるべきかについて議論したいと考えています。

【16:00-16:20】 交流ひろばⅡ (2件)

④ 【ブレイクアウトルーム1】 介護専門用語学習Webサイト『やさしい日本語でまなぶ介護専門用語集』:

布尾勝一郎(立命館アジア太平洋大学)・中川健司(横浜国立大学)

私たちは日本の介護福祉士国家試験を受験する外国人介護労働者に対する学習支援について研究しているグループです。介護用語の中には日本独自のものがあり、そのような語を直訳しても必ずしも内容の理解につながりません。そこで、やさしい日本語を用いた介護専門用語学習のためのWebサイトを開発しましたので、ご紹介し、皆様と意見交換をしたいと考えています。介護の日本語の教材や学習支援のあり方などに興味のあるかたはぜひお越しください。

⑤ 【ブレイクアウトルーム2】 大学と地域日本語教室の持続可能な連携—「仲介者」として緩くつながる—

松永典子(九州大学)

2019年度より福岡での地域日本語教育サポートについての実践研究をグループで始め、2020年度は福岡市国際部と福岡市の日本語教育の体制・連携・人材づくりの課題を解決すべく、勉強会を行いました。同様の課題にご関心のある方とぜひ意見交換を行いたいと思っています。

【16:20-16:50】 よろず雑談会

※ブレイクアウトルーム間を自由に移動していただく予定です。詳細は当日司会よりご説明します。

例年、九州・沖縄支部集会では懇親会を行っています。それに代わって、当日の講演や発表で感じたこと、日々悩んでいること、だれかに意見を聞きたいことなど、ざっくばらんに話し合う雑談会を開きます。限られた時間ですが、交流や意見交換の場としてお使いください。



留学生の LMS への書き込みに見られる高次思考力

一文のモダリティに注目してー

松本剛次（長崎外国語大学）

1. 背景と目的

本研究は、ラーニング・マネジメント・システム（以下「LMS」）への書き込みに見られる高次思考力の分析を通して、大学での教育は、留学生に対しても、「学士力」に代表される「能力」を伸ばすことができているかについて、文のモダリティという観点から調査を行ったものである。

留学生に対する教育も、大学で行われている以上、それは大学教育の一環であり、当然、大学教育全体の目標の中に位置づけられる必要がある。そして、現在、大学、特に学士課程での教育の目的の一つとして掲げられているのが、例えば中央教育審議会が2008年に発表した学士力というものである。学士力はいくつかある「能力」のうちの一つであるが、それら諸能力に共通して認められるものは、いわゆる高次思考力の育成である。アンダーソン（2001）によるブルームのタクソノミーの改訂版（図1）では、思考の階梯は下から「知識」「理解」「応用」「分析」「統合」「評価」とされ、このうちの上位3つである「分析」「統合」「評価」が高次思考力とされる。

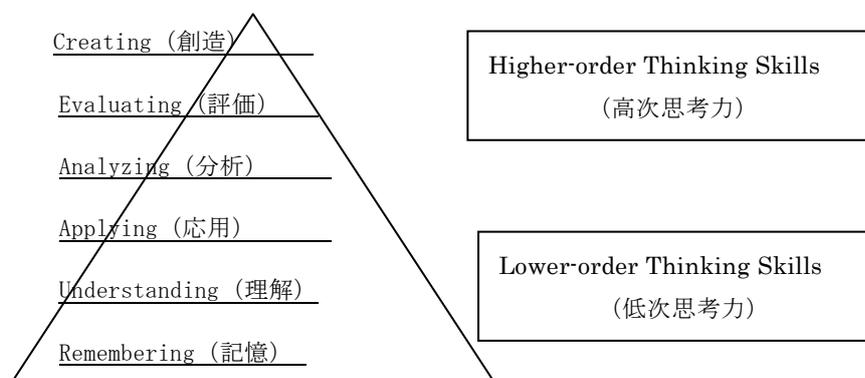


図1：アンダーソン（2001）によるブルームの教育目標分類（Taxonomy）の修正版*

*アンダーソン（2001）をもとに作図

2. 方法

伊集院・高橋（2010）は日本語記述文法研究会編（2003）をもとに、モダリティのタイプとその下位分類を整理している（表1）。そのうち、「評価のモダリティ」は高次思考能力における「評価」に、「認識のモダリティ」「説明のモダリティ」は「分析」に、そして「表現類型のモダリティ」の下位分類である「行為系」が「創造」にそれぞれ対応してい

る。そこで本研究では、留学生が毎回の授業の課題として書いた文章における文のモダリティの分析を通して、そこには高次思考力がどの程度反映されているかの調査を行った。

文のモダリティを判定する際には、文末の形式にこだわらず、文全体を見た上で、そのモダリティを総合的に判断した。具体的には、表2として示すような形で、日本語記述文法研究会編（2003）を参考に各モダリティのタイプの定義を明文化し、その上で伊集院・高橋（2010）の基準も参考にしながら（つまりは文末の形式も参考としながら）、全体的にその文がモダリティのタイプのどれに該当しているかを判断していった。表3に示すものが、以上のようにして実施したコーディング作業の一例である。

表1 モダリティの分類と主な言語形式*

* 伊集院・高橋（2010, p.14）より引用

モダリティのタイプと下位分類			主な言語形式	
①	表現類型のモダリティ	情報系	叙述	平叙文
			疑問	疑問文
			意志	(よ)う
		行為系	勧誘	(よ)う・ないか
			行為要求	なさい・てくれ
			感嘆	なんと～ことだろう
②	評価のモダリティ	必要	べきだ・なくてはいけない	
		許可・許容	てもいい	
		不必要	なくてもいい	
		不許可・非許容	てはいけない	
	認識のモダリティ	断定	断定形	
		推量	だろう	
証拠性	蓋然性	かもしれない・にちがいない		
	観察・推定 伝聞	ようだ・らしい・(し)そうだ (する)そうだ		
③	説明のモダリティ		のだ・わけだ	
④	伝達のモダリティ	伝達態度のモダリティ	ね・よ・よね	
		丁寧さのモダリティ	普通体・丁寧体	

- ①文の伝達的な表し分けを表すもの ②命題が表す事態のとらえ方を表すもの
③文と先行文脈との関係を表すもの ④聞き手に対する伝え方を表すもの

調査は「読解」の授業を受けた6名の留学生を対象に、その1学期分のLMSへの書き込み、各人計11回分をデータとして行われた（授業欠席による未提出の回もある）。LMSへの書き込みは毎回の授業の宿題で、各回の授業で扱われたテーマについて自分の意見や考えを自由に書いてくるというものであった。

3. 結果

調査の結果、「分析」「評価」に相当する「評価」「認識」「説明」のモダリティの使用は6名全員に確認できたが（表4、図2）、「創造」に相当する「行為系」の使用が確認できたのは1名のみであった（表5）。しかしその1名（S01）も「分析・評価」を経過した上での「創造」であるとは考えにくいものであった。一方「分析・評価」で留まっているが、非常に論理的な文章を書く者の存在も確認され、その者（S07）は「表現類型のモダリティ」の中でも、「情報系」とされる「叙述」や「疑問」のモダリティを多く使用していることが確認できた（図2）。これらのモダリティは低次思考能力の側に属するものと考えられる。そこから高次思考能力は低次思考能力に強く下支えされていると考えられた。

表2 モダリティのタイプの定義*

* 日本語記述文法研究会（2003）をもとに筆者が作成

モダリティのタイプ	定義
表現類型のモダリティ	伝達的な機能の表し分けという、文の基本的な性質をきめるもの
叙述のモダリティ	その文が表す内容、話し手の判断を聞き手に伝えるという伝達的な機能を持つ
疑問のモダリティ	その命題に対して話し手の判断が成り立たないことを表す
意思のモダリティ	話し手が自分自身の行為の実行を決定したことを表す
勧誘のモダリティ	話し手の行動を前提として、聞き手に行為の実行を誘いかけることを表す
行為要求のモダリティ	話し手が行為の実行を聞き手に求めることを表す
感嘆のモダリティ	何らかの誘因によって引き起こされる、驚きを伴った感動を表す
評価のモダリティ	話し手が何らかの事態を延べ伝えるときに、その事態に対する話し手の評価的な捉え方を表す
必要のモダリティ	広い意味での事態の必要性を表す
許可・許容のモダリティ	事態の実現が許されると認めることを表す
不必要のモダリティ	事態が実現されないことが許容されることを表す
不許可・非許可のモダリティ	事態の実現が許されないものであることを表す
認識のモダリティ	事態に対する話し手の認識的な捉え方を表す
断定のモダリティ	話し手が事態の成立を主張する際、事態を経験や知識によって直接的に認識していることを表す
推量のモダリティ	話し手が事態の成立を主張する際、事態を想像や思考によって間接的に認識していることを表す
蓋然性のモダリティ	話し手が事態について可能性や必然性があることとして把握して認識していることを表す
観察・推定のモダリティ	話し手自身が観察したことや証拠に基づく推定を通して事態を認識していることを表す
伝聞のモダリティ	話し手が伝聞（伝え聞いたこと）に基づく推定を通して事態を認識していることを表す
説明のモダリティ	論理的帰結など、定義付け、説明など、文と先行文脈との関係づけを表すもの

表3 文のモダリティのコーディングの例

行番号	テキスト	モダリティのタイプ (大分類)	下位分類1 (中分類)	下位分類2 (小分類)
1	世界中こと人やモノ、お金や企業が繋がってる現代、今後ますます「グローバル化」が進むと言われてます。	認識	証拠性	伝聞
2	それにつれて、国際語が重視されています。	表現類型	情報系	叙述
3	国際語の必要性と言えば、どんな人でも人間精神の所産をすべて知ったり、どんな人でも国際的会議に参加したりできることが浮かびます。	認識	証拠性	観察・推定
4	これらの必要性は誰もわかっているはずですし、どうしても否定できないくらい確かなことですし、でも、普通の人にとって、どれだけ日常生活の役に立てるのでしょうか。	表現類型	情報系	疑問
5	国際関係や外国文化に関することなどを知らうとしない人からしてみれば、国際語はどうでもいいようなものになってしまうと思います。	認識	推量	
6	身に付くために、かなり時間をかけないと行けないので、むしろ国際語は負担だとしか思われるものだけだと言えます。	認識	推量	
7	だからといって、どんなものでも、誰にでも好きになってもらえるわけがありません。	説明		
8	国際語について、我々が検討すべきなのは、必要性がどれだけあるかということだけではなくて、どうやって普及させるのがもっと重要です。	評価	必要	
9	普及させようとする、まず、どんな人に知ってもらったらいいかということを考える方がいいです。	評価	必要	
10	国際語に興味がない人に、いくらその必要性を伝えようとしても無駄に決まっているので、興味がある人だけにサロンとか、講座とかを行うと十分です。	評価	許可・許容	

さらには、「表現類型のモダリティ」の下位分類である「情報系」のさらに下位分類である「疑問」と判定された文を取り上げ、質的に見てみたところ、「分析・評価」のレベルで留まっている者（S07）には「調査系」の質問が、「創造」の出現が認められるものの、それが「分析・評価」を踏まえてのものではないと考えられる者（S01）には「アイデア系」の疑問が多いことが確認された（図3）。

表 4：モダリティのタイプ（大分類）の出現頻度と割合

被験者番号		1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目	11回目	平均出現率
S01	表現類型のモダリティ	2 (20.0%)	0 (0.0%)	6 (28.6%)	7 (53.8%)	2 (66.7%)	1 (16.7%)	4 (66.7%)	未提出	9 (60.0%)	2 (22.2%)	3 (27.3%)	36.2%
	評価のモダリティ	3 (30.0%)	0 (0.0%)	5 (23.8%)	1 (7.7%)	1 (33.3%)	1 (16.7%)	1 (16.7%)		3 (20.0%)	2 (22.2%)	2 (18.2%)	18.9%
	認識のモダリティ	4 (40.0%)	3 (75.0%)	10 (47.6%)	3 (23.1%)	0 (0.0%)	2 (33.3%)	1 (16.7%)		3 (20.0%)	4 (44.4%)	4 (36.4%)	33.7%
	説明のモダリティ	1 (10.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	2 (15.4%)	0 (0.0%)	2 (33.3%)	0 (0.0%)		0 (0.0%)	1 (11.1%)	2 (18.2%)	11.3%
S03	表現類型のモダリティ	7 (53.8%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	2 (28.6%)	2 (66.7%)	1 (25.0%)	2 (20.0%)	2 (15.4%)	4 (26.7%)	5 (62.5%)	6 (60.0%)	36.2%
	評価のモダリティ	4 (30.8%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5.3%
	認識のモダリティ	2 (15.1%)	4 (80.0%)	2 (40.0%)	5 (71.4%)	1 (33.3%)	2 (50.0%)	7 (70.0%)	8 (61.5%)	10 (66.7%)	3 (37.5%)	4 (40.0%)	51.4%
	説明のモダリティ	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	1 (10.0%)	2 (15.4%)	1 (6.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	7.0%
S04	表現類型のモダリティ	1 (14.3%)	1 (12.5%)	0 (0.0%)	2 (20.0%)	5 (35.7%)	1 (7.1%)	5 (29.4%)	5 (35.7%)	2 (16.7%)	3 (21.4%)	2 (22.2%)	19.6%
	評価のモダリティ	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (10.0%)	1 (10.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (23.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	10 (71.4%)	1 (11.1%)	11.5%
	認識のモダリティ	6 (85.7%)	5 (62.5%)	6 (60.0%)	4 (40.0%)	7 (50.0%)	11 (78.6%)	7 (41.2%)	9 (64.3%)	8 (66.7%)	0 (0.0%)	6 (66.7%)	56.0%
	説明のモダリティ	0 (0.0%)	2 (25.0%)	3 (30.0%)	3 (30.0%)	2 (14.3%)	2 (14.3%)	1 (5.9%)	0 (0.0%)	2 (16.7%)	1 (7.1%)	0 (0.0%)	13.0%
S05	表現類型のモダリティ	未提出	未提出	2 (40.0%)	0 (0.0%)	2 (66.7%)	2 (25.0%)	2 (14.3%)	3 (75.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	3 (60.0%)	33.4%
	評価のモダリティ			0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	4 (80.0%)	0 (0.0%)	22.8%		
	認識のモダリティ			3 (60.0%)	2 (66.7%)	0 (0.0%)	3 (37.5%)	11 (78.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	27.0%	
	説明のモダリティ			0 (0.0%)	1 (33.3%)	1 (33.3%)	3 (37.5%)	1 (7.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (40.0%)	16.8%	
S06	表現類型のモダリティ	4 (44.4%)	3 (37.5%)	0 (0.0%)	5 (71.4%)	6 (54.5%)	4 (40.0%)	1 (14.3%)	2 (28.6%)	2 (40.0%)	2 (50.0%)	4 (50.0%)	39.2%
	評価のモダリティ	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	3 (37.5%)	7.0%
	認識のモダリティ	5 (55.6%)	5 (62.5%)	3 (100%)	1 (14.3%)	5 (45.5%)	5 (50.0%)	5 (71.4%)	2 (28.6%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	1 (12.5%)	44.6%
	説明のモダリティ	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (14.3%)	0 (0.0%)	1 (10%)	1 (14.3%)	3 (42.9%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	9.2%
S07	表現類型のモダリティ	4 (57.1%)	10 (71.4%)	10 (75%)	9 (75.0%)	2 (25.0%)	5 (71.4%)	13 (86.7%)	11 (78.6%)	7 (100%)	9 (90.0%)	7 (77.8%)	73.1%
	評価のモダリティ	0 (0.0%)	2 (14.3%)	0 (0.0%)	1 (8.3%)	1 (12.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3.2%
	認識のモダリティ	3 (42.9%)	1 (7.1%)	4 (16.7%)	2 (16.7%)	5 (62.5%)	1 (14.3%)	1 (6.7%)	1 (7.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	16.9%
	説明のモダリティ	0 (0.0%)	1 (7.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (14.3%)	1 (6.7%)	2 (14.3%)	0 (0.0%)	1 (10.0%)	2 (22.2%)	6.8%

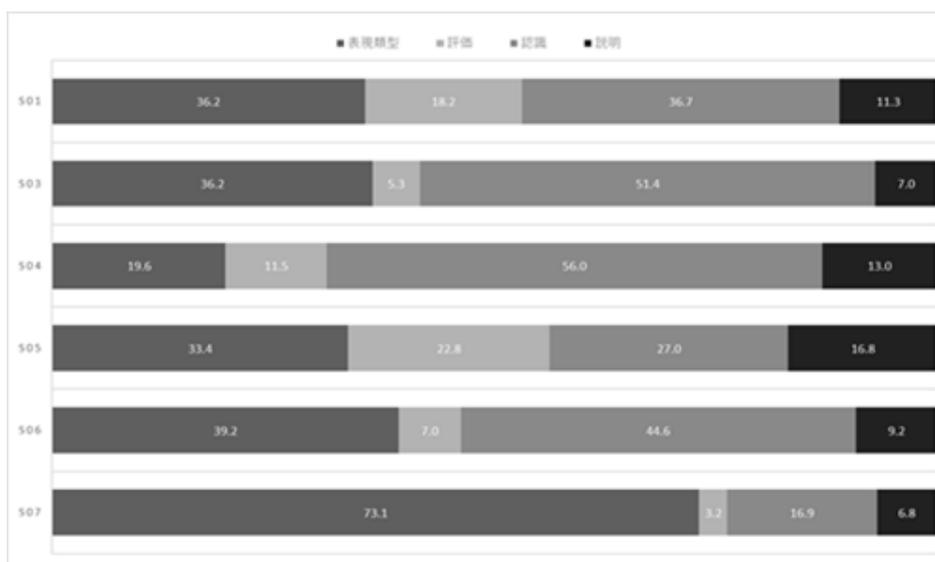


図 2 被験者ごとのモダリティのタイプ（大分類）の出現率（全 11 回平均）

4. まとめと考察、及び今後の課題

以上、まずは、高次思考力について、「分析」「評価」についてはすべての被験者の書き込みにおいてその出現を確認することができた。これが大学での教育の結果として身についたものなのかどうかは、本研究の結果からのみでは不明だが、大学での学びにおいて、この二つの「能力」の使用が必要不可欠であり、ある程度のレベルに達した学生であれば、それを身に着けることはできている、ということは、確認できた。しかし、一方では、「分析」「評価」のレベルには到達できたとしても、それを超えて、「創造」のレベルにまで到達するにはまだ距離があることも本研究の結果から見いだされた。また、反対に「創造」には到達しているが、それが「分析・評価」を十分に踏まえてのものではない事例も確認

表5 表現類型のモダリティの下位分類の出現頻度と割合

被験者番号	表現類型の下位分類	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目	11回目
S01	情報系 叙述	1 (10%)	-	5 (23.8%)	4 (30.8%)	2 (66.7%)	-	2 (33.3%)	未提出	6 (40%)	2 (22.2%)	2 (18.2%)
	情報系 疑問	1 (10%)	-	1 (4.8%)	-	-	1 (16.7%)	1 (16.7%)		2 (13.3%)	-	-
	行為系 意識	-	-	-	1 (7.7%)	-	-	-		-	-	-
	行為系 勧誘	-	-	-	-	-	-	1 (16.7%)		1 (6.7%)	-	1 (9.1%)
	行為系 行為要求	-	-	-	2 (15.4%)	-	-	-		-	-	-
	感嘆	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-
	合計	2 (20.0%)	-	6 (28.6%)	7 (53.8%)	2 (66.7%)	1 (16.7%)	4 (66.7%)	9 (52.9%)	2 (22.2%)	3 (27.3%)	
S03	情報系 叙述	7 (53.8%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	2 (28.6%)	2 (66.7%)	1 (25.0%)	2 (20.0%)	1 (7.7%)	4 (26.7%)	4 (50%)	5 (50%)
	情報系 疑問	-	-	-	-	-	-	-	1 (7.7%)	-	1 (12.5%)	1 (10%)
	行為系 意識	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 勧誘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 行為要求	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	感嘆	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	合計	7 (53.8%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	2 (28.6%)	2 (66.7%)	1 (25.0%)	2 (20.0%)	2 (15.4%)	4 (26.7%)	5 (62.5%)	6 (60.0%)
S04	情報系 叙述	1 (14.3%)	1 (12.5%)	-	2 (20.0%)	5 (35.7%)	1 (7.1%)	5 (29.4%)	5 (35.7%)	2 (16.7%)	2 (14.3%)	2 (22.2%)
	情報系 疑問	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 意識	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 勧誘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 行為要求	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	感嘆	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 (7.1%)	-
	合計	1 (14.3%)	1 (12.5%)	-	2 (20.0%)	5 (35.7%)	1 (7.1%)	5 (29.4%)	5 (35.7%)	2 (16.7%)	3 (21.4%)	2 (22.2%)
S05	情報系 叙述	未提出	未提出	2 (40.0%)	-	2 (66.7%)	2 (25.0%)	2 (14.3%)	3 (75.0%)	1 (20.0%)	-	3 (60.0%)
	情報系 疑問			-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 意識			-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 勧誘			-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 行為要求			-	-	-	-	-	-	-	-	-
	感嘆			-	-	-	-	-	-	-	-	-
	合計			2 (40.0%)	-	2 (66.7%)	2 (25.0%)	2 (14.3%)	3 (75.0%)	1 (20.0%)	-	3 (60.0%)
S06	情報系 叙述	4 (44.4%)	3 (37.5%)	-	5 (71.4%)	6 (54.5%)	4 (40.0%)	1 (14.3%)	2 (28.6%)	2 (40.0%)	2 (50.0%)	4 (50.0%)
	情報系 疑問	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 意識	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 勧誘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 行為要求	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	感嘆	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	合計	4 (44.4%)	3 (37.5%)	-	5 (71.4%)	6 (54.5%)	4 (40.0%)	1 (14.3%)	2 (28.6%)	2 (40.0%)	2 (50.0%)	4 (50.0%)
S07	情報系 叙述	3 (42.9%)	7 (50.0%)	10 (75%)	9 (75.0%)	2 (25.0%)	5 (71.4%)	9 (60%)	10 (71.4%)	7 (100%)	9 (90.0%)	7 (77.8%)
	情報系 疑問	1 (14.3%)	3 (21.4%)	-	-	-	-	4 (26.7%)	1 (7.1%)	-	-	-
	行為系 意識	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 勧誘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	行為系 行為要求	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	感嘆	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	合計	4 (57.1%)	10 (71.4%)	10 (75%)	9 (75.0%)	2 (25.0%)	5 (71.4%)	13 (86.7%)	11 (78.6%)	7 (100%)	9 (90.0%)	7 (77.8%)

できた。

この事実から、今後の課題として、まずは、「分析」「評価」の段階で固定化してしまっている者をいかにすれば、「創造」の段階へと引き上げることができるかという課題が引き出される。そしてもう一つ、「創造」はある程度確認できるものの、それが十分な「分析」や「評価」を踏まえた上ではない場合は、どうすればその「創造」を「分析」や「評価」を踏まえたものとしていくことができるか、何かそのためのヒントとなるようなものは見いだせるか、という課題も引き出される。

しかし、これらの課題については「分析・評価」のレベルで留まっている者には「調査系」の質問が、「創造」の出現が認められるものの、それが「分析・評価」を踏まえてのものではないと考えられる者には「アイデア系」の疑問が多いことが確認されたことから、「疑問」のタイプを変えることで思考のタイプの方も変えていくことができるのではない

S01 の「疑問」

- ・これらの必要性は誰もわかっているはずですし、どうしても否定できないくらい確かなことですし、でも、普通の人にとって、どれだけ日常生活の役に立っているのでしょうか。
- ・文法の面からすると、日本語と中国語の違いと言えば、何かが浮かぶのか？
- ・それほど簡単だったら誰も翻訳者になれるのではないだろうか。
- ・では、どうすれば彼らに希望を与えられますか。
- ・グローバル化が進む世界では、その日本独自の価値観こそ競争力を生み出すべきではないでしょうか。
- ・これについて、今後、どのようにしたら、海外の方にもっと興味を持ってもらえますか。

S07 の「疑問」

- ・現在の状況に例えば、なぜ英語は世界の公用語になったのでしょうか。
- ・私たちは英語を学ぶ前に異文化に対してちゃんと理解しているのか。
- ・このように韓国は英語勉強に対する関心と支出は大きいですが、それに比べてなぜ英語教育は効率低いのか。
- ・英語教師の能力不足かそれとも環境の問題か。
- ・「良い翻訳は何なのか」について考えて感じた疑問は、直訳が良い翻訳であるのかそれとも意識が良い翻訳であるのか。
- ・そして翻訳した文を見て、直訳と意識をどのような基準で区別するのか。
- ・直訳は原文を一文字も間違えなくそのまま移すことを指し、意識は翻訳する言語の文化によって伝えやすく少しだけ修正する事を指しているのか。
- ・もし私が役者だったらどのような方法を使って翻訳をしたほうがいいのか。
- ・経済悪化を理由として安い値段で採用してまた簡単に解雇をする会社で不安な状態で働き続けられるのであるのか。

図3 S01 と S07 における「疑問文」の使用パターン

かという仮説が引き出された。パターン化、固定化されてしまった思考の方式に対して、「疑問、質問のタイプを意識的に変えてみる」というアプローチである。

今回は被験者数も少なく、その意味では予備調査、ケーススタディーの範疇を超えることのない調査であった。より被験者集を増やした上で今回見いだされた仮説に対する更なる検証を行うのが、今後の課題である。

参考文献

Anderson, L.W et al. *A taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's*. Pearson, 2001.

伊集院郁子・高橋圭子 (2010) 「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティー—日本・中国・韓国語母語話者の比較」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』第 36 号, pp. 13-27.

日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティー』くろしお出版

公益社団法人日本語教育学会

支部活動委員会

委員長：橋本直幸

副委員長：國澤里美・嶋ちはる・永井涼子

委員：新城直樹・井上里鶴・内田さつき

御館久里恵・雁野恵・菊池哲佳

木下謙朗・島崎薫・世良時子

高橋志野・田川恭識・中河和子

中東靖恵・平田未季・深川美帆

松尾憲暁・元木佳江・山路奈保子

山本裕子・ルチラ パリハワダナ

九州・沖縄支部運営協力員

山元淑乃・吉川達

審査・運営協力員

木谷直之・西口光一・松浦康世

公益社団法人日本語教育学会

2021年度第1回支部集会【九州・沖縄支部】予稿集

発行 2021年6月24日

発行者 公益社団法人日本語教育学会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F

TEL 03-3262-4291 FAX 03-5216-7552 E-mail office@nkg.or.jp

URL <http://www.nkg.or.jp>